

## 所謂広田型貝輪の細分について

木村, 幾多郎

<https://doi.org/10.15017/2231026>

---

出版情報 : 史淵. 117, pp.91-124, 1980-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

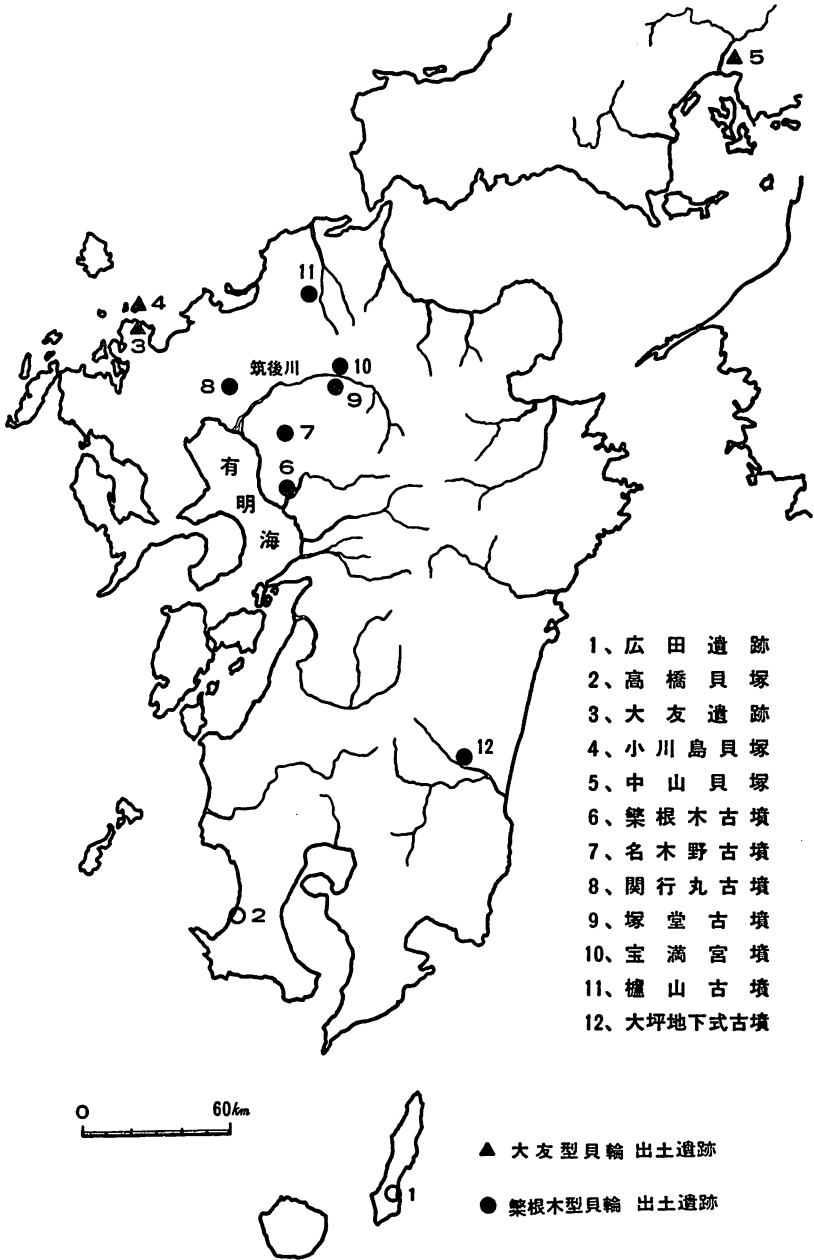
## 所謂広田型貝輪の細分について

木村 幾多郎

### 一、はじめに

北部九州の弥生時代遺跡を中心として出土する南海産貝製縦切り貝輪の貝種の査定が、永井昌文氏の実験的研究によっておこなわれてから既に十年以上になる。<sup>(1)</sup>それまでは、特にゴホウラ製貝輪では、貝輪の形態の違いが、貝種の違いと推定されることがあり、ゴホウラ貝製と査定されていた貝輪は比較的大形で原材料としての貝の形が良く残る貝輪にすぎなかつた。<sup>(2)</sup>永井氏の貝種の査定によって各種形態の縦切り貝輪が、同一貝種(ゴホウラ貝)製貝輪の形態分類として意味を持つようになり、永井氏の研究成果の発表とともに、三島格・橋口達也氏によって、形態分類及び出土地名表が公表された。<sup>(3)</sup>

それによれば、ゴホウラ貝製貝輪は五型式(広田型・土井ヶ浜型・金隈型・立岩型・諸岡型)に一応分類され、イモガイ製については、従来の「縦切り・横切り」を改めて、「縦型・横型」の二型式に分類した。ゴホウラ製五型式・イモガイ製二型式内で、若干の形態の違い、時間的違いなどすでに指摘されており、<sup>(4)</sup>その時代的・地域的な検討を各型式に加えることが必要になってきている。それより以前、河口貞徳氏は、ゴホウラ貝の利用部位の違いにより、「背面腕輪」と「腹面腕輪」に分類し、前者は南島に限って分布し(高橋貝塚を除く)、後者は九州本土のみに出土し、内孔は「D」字形を呈するとした(河口一九七三)。ここでいう背面腕輪が即ち広田型貝輪であり、腹面腕輪が代表的出土



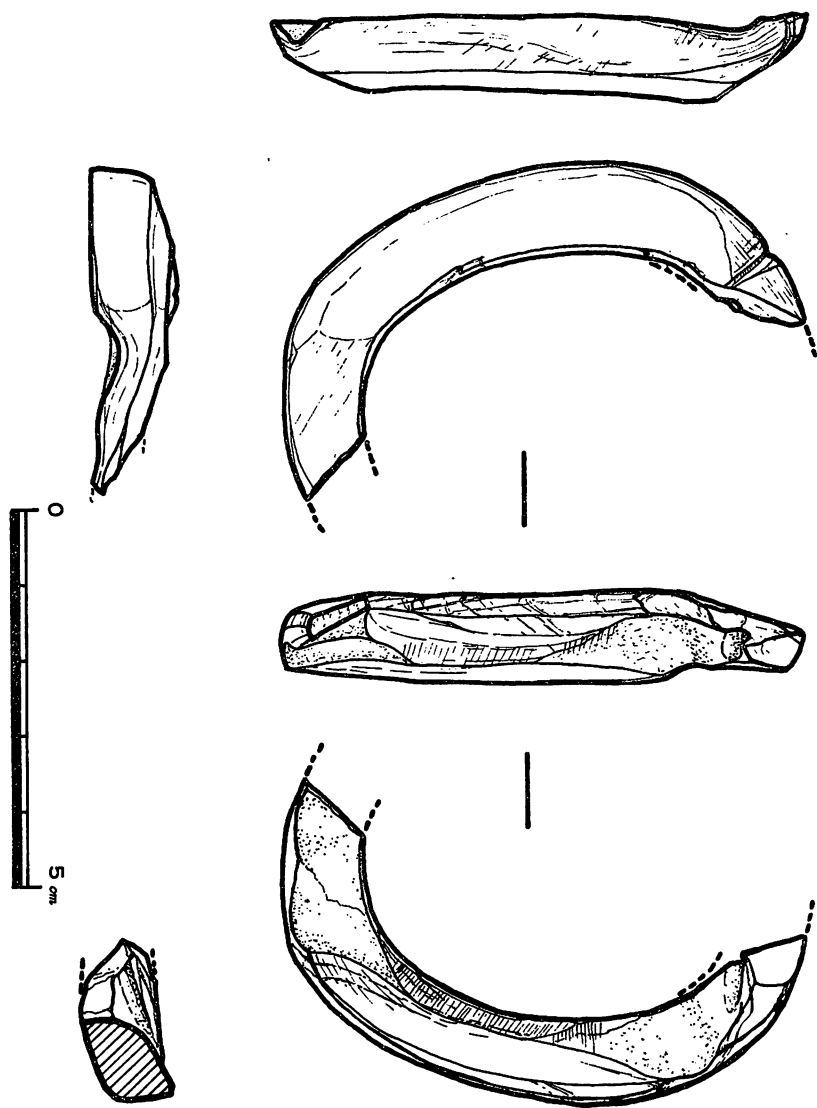
第1図 大友型・築根木型貝輪出土遺跡分布図

遺跡名をとって、土井ヶ浜・金隈・立岩・諸岡の各型式に分けられた。

所謂広田型貝輪は、南島型貝輪ともいわれてきたように主に種ヶ島以南に分布するが、九州本土・瀬戸内地方にも広田型と分類されるものが分布している(第一図)。永井昌文氏は、広田遺跡を中心に南島に分布する貝輪と、九州本土に分布し、鏝広で主に古墳より出土する貝輪を分類し、前者を広田型亜型A、後者を亜型Bと分類した(永井一九七八)。

一九七五年八月、富樫憲次氏(当時小川島小学校教頭)等が中心となり、佐賀県東松浦郡呼子町小川島の田島神社境内を発掘し、一点の巻貝製貝輪片(第二図)を得た。発掘に参加していた筆者が、それを大学に持ち帰り永井昌文教授に検討を依頼した。貝輪全体の約 $\frac{1}{3}$ 程度の破片で貝種推定に困難を感じたが、その厚み・後溝・前溝の凹みなどからゴホウラ貝であろうと考えられた。しかし、通常のゴホウラ貝(やや小形の貝も含めて)より小ぶりで、危惧を感じた。類例を検索すると、小川島の対岸の呼子町大友遺跡の第二次調査(一九七〇年八月)第23号敷石墓出土の貝輪と類似しており、現棲ゴホウラ貝・大友貝輪・小川島貝輪を持ち寄り検討したところ、小川島貝輪は、大友貝輪と大きさが異なるだけで、面取り加工法が同一であることが判明した。大友貝輪は、ゴホウラ貝殻背部利用貝輪ということで広田型に分類されていたが、螺背部における利用部位の違い、それにしたがっての形態の違い、分布状況から、亜型又は別型式とするのが適当であろうと述べたが、その詳細はふれなかった。本小稿は、九州本土において広田型(南島型)と分類される貝輪は、広田遺跡出土品を中心とする所謂広田型貝輪とは区別して考えるのが適当であろうことを述べるのを目的としている。

所謂広田型貝輪の細分について（木村）



第2図 大友槌貝輪（小川島貝塚出土）

## 二、広田型貝輪の細分

広田型貝輪の型式設定のもととなった広田遺跡（鹿児島県熊毛郡南種子町広田）出土貝輪は、その詳細は発表されておらず不明な点が多いが、一応今日までに判明している資料と対比しながら、大友出土貝輪と永井昌文氏により広田型亜型Bとされたものについて検討を加えてみたい。

広田型貝輪を多量に出土している広田遺跡のゴホウラ製貝輪には、大きく分けて、

I、楕円形をなし、鏝の中も一定で全体を研磨し、あたかもオオツタノハ製貝輪を模したかに見えるもの。（外唇部・肩角を取り入れず）

II、所謂広田型として、広く示されているもので、全体的に円形に近く鏝広で、断面「ハ」の字形で高い。内孔は、円形又は楕円形である。肩角を取り入れ、又は一部外唇部に近い所まで取り入れる例がある。

III、全体的に限丸方形に近く、やや横長の傾向もある。肩角を取り入れ、それを特に強調する例が多い。内孔は限丸方形に近い。

の三種類が認められる。広田遺跡は、上・中・下の三層に分けられており（区分・盛園一九五八）、それによれば、上層にはIII類が多く、中層にはII類、下層にはI・II類が認められオオツタノハ製貝輪が多い傾向にある。時期的には、遺跡の一部に弥生時代前期末の土器が認められ、遺跡の上限は前期末にのぼると思われるが、多くは弥生時代後期に属するものと考えられている。

### (一) 大友型貝輪

#### (1) 貝輪の形

大友遺跡23号敷石墓出土貝輪（第三図）は、成年女性の左右の前腕に三個つつ着装されていたとされる貝輪である

所謂広田型貝輪の細分について（木村）

が、その出土状況等については明らかにされていない。形態は、他の背面利用貝輪と同じく、内孔（径6.3×6.3 cm）はやや角ばった感じの円形で、鏝は螺背部肩角に寄った部分はやや細めになるが、巾はせまく一定に近く（約1.2 cm）、外形も内孔にそった形態をとる。この貝輪が、ゴホウラ貝製であることはすでに周知のことであるが、他型式の貝輪と比較のため根拠を示す。貝輪の一方の辺の厚みは、ゴホウラ貝の特長である外唇部の肥厚を示している。螺塔に向いた面（以下「内面」と呼ぶ）には、前溝と後溝の凹みの一部が未加工のまま残っている。貝輪上辺には螺塔部の縫線が認められる。外面上方には、肩角より続く螺肋の隆起部の屈曲が認められ、又外唇部外面は、やや凹むが、貝輪の厚みを持つ辺の外面にその凹みが認められる。このことより、殻口面に約20°の角度で外唇部を取り込んだ螺背部を、次体層又はそれに近い部分よりほぼ垂直に縦切りにした状態の形を持つ（第四図）。広田型で普遍的にみられる肩角部を取り入れることはない。

現在までにこのような形態を持つ貝輪は、以下三遺跡より出土しているにすぎない。

1 大友遺跡（佐賀県東松浦郡呼子町大友）

2 小川島貝塚（佐賀県東松浦郡呼子町小川島）

3 中山貝塚（広島県広島市中山町東谷）

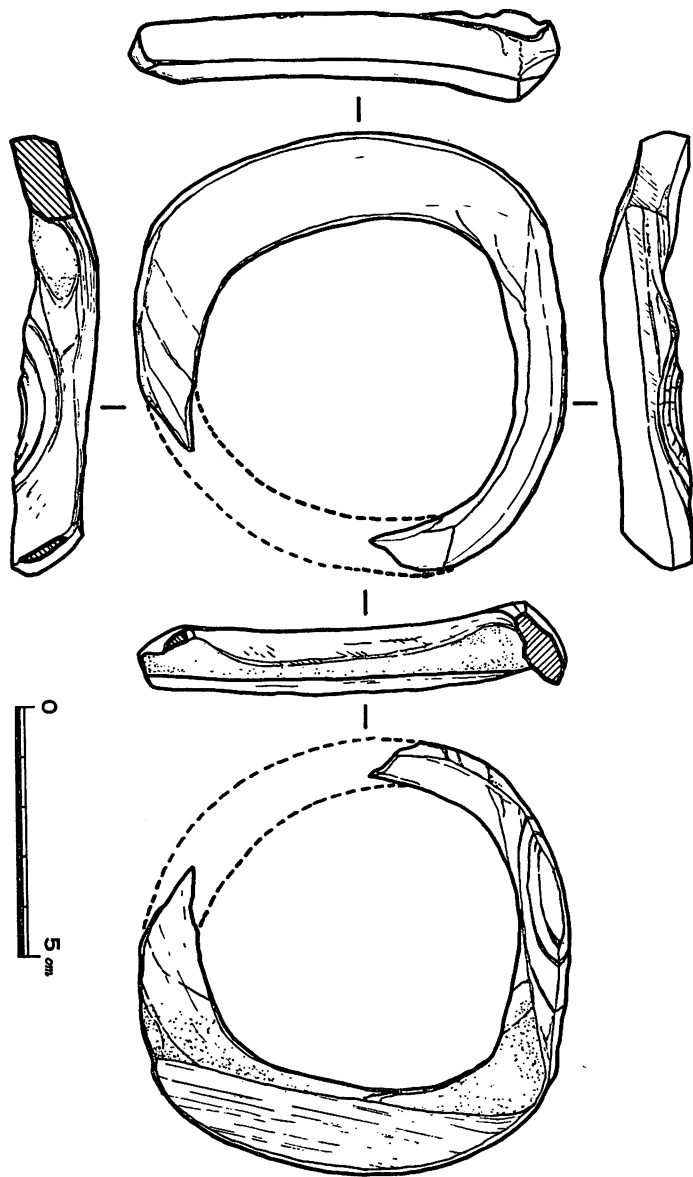
亜型Bと、高橋貝塚（鹿児島県）出土例を除くと、九州本土及び瀬戸内地方における所謂広田型貝輪出土地のすべてである。

## (2) 大友型貝輪出土遺跡

### I、大友遺跡

大友遺跡は、富栴憲次・河兎哲司氏等地元研究者によって一九六八年末～一九六九年初にかけて断続的ではあるが第一次調査が行われ、引き続き第二次調査が佐賀県教育委員会により一九七〇年八月四日～八月十二日に行われた。

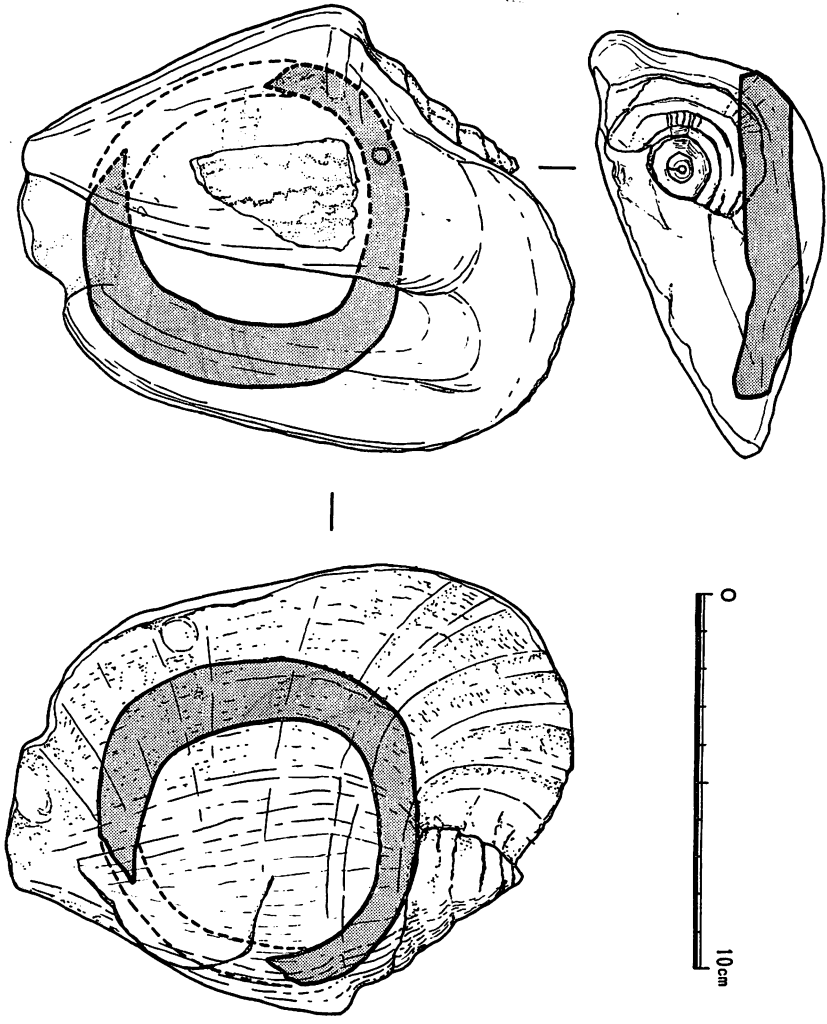
所謂広田型貝輪の細分について（木村）



第3図 大友型貝輪（その2）（大友遺跡・第23号敷石墓出土）



所謂広田型貝輪の細分について（木村）



第4図 大友型貝輪の取り方

調査年次	遺構名	貝輪貝種		着装部位		性別	年令	備考	
				r.	l.				
1次	K-1	イモガイ	縦型	10	9	1	♀	熟年	副葬品 C/C   拔歯
	K-9	"	"	1		?	♀	?	
	C-3	ベンケイガイ		6	—				
	C-4	イモガイ	縦型	4	4	0	♂	成年	
2次	E号石棺	イモガイ	縦型	6	6	0	♂	老年	
	1号敷石墓	オオツタノハ		2	1	1	♀	成年	
	23号敷石墓	ゴホウラ(大友型)		6	3	3	♀	成年	
	46号土塚墓	オオツタノハ		5	3	2	♂	成年	
	47号敷石墓	"		5	3	2	♀	老年	
	50号土塚墓	"		7	4	3	♀	熟年	
	"	"		3	0	3	♀	成年	
	69号配石墓	"		1	1	0	?	?	

大友遺跡出土貝輪一覧表

又、一九七九年八月佐賀県文化課の手で（調査団長・内藤芳篤長崎大学教授）、第三次調査が実施されている。

遺跡は、玄海灘に面した友崎と土器崎にはさまれた延長2kmにおよぶ弧状で遠浅の砂浜海岸の中間部分の砂丘上に営まれた埋葬遺跡である。三次にわたる調査によって、甕棺墓・石棺墓・敷石墓・配石墓・土塚墓の各種遺構が検出され、それらに伴う埋葬人骨も100体以上出土している。年代的には、甕棺墓よりすれば、弥生時代前期後半から後期初頭まで認められる。貝輪は一部を除き埋葬人骨に装着されて出土したものであり、オオツタノハ・イモガイ・ゴホウラ製貝輪があり、着装例はなかったが、ベンケイガイ製貝輪も出土している。

このように大友遺跡の貝輪のあり方は、長崎県五島の浜郷遺跡・大浜遺跡（小田一九七〇）・平戸市根獅子遺跡（坂田一九七三）などにみられるように、オオツタノハを伴い、埋葬遺構として配石

墓・敷石墓・箱式石棺が存在するなど共通する点が多く、又、貝輪の種類・着装部位に性別による区別がないことから、南島(広田遺跡)と類似する点がある事も事実である。二枚貝製貝輪を伴うなど縄文時代以来の伝統を持ち、西北九州の砂丘埋葬遺跡として特色づけられる面も持っている。

貝輪の所属年代は、敷石墓の上層に弥生前期末の壺棺が埋葬される例があり、敷石墓は弥生前期後半代に行われたと推定され、23号墓出土ゴホウラ製貝輪もその時期におくことができよう。ついでにイモガイ製縦型貝輪を見ると、K-1・K-9 甕棺墓例のように伯玄式甕棺内骨に着装されており、前期後半に属するものと推定される。C-4 石棺墓人骨着装イモガイ製縦型貝輪は、K-1 人骨着装貝輪と加工上同じ特長を持つており、同一地において作成されたと考えられ、年代もそれと同じ頃において良いと思われる。墓地内における各貝輪のあり方を見ると、イモガイ製縦型貝輪着装人骨は、遺跡南東部にグループをなして存在し(K-1・K-9・C-4・E号石棺)、付近よりベンケイガイ製貝輪が出土する。オオツタノハ貝輪は遺跡北東部にグループをなす(1号敷石墓・46号土塚墓・47号敷石墓・50号土塚墓)。ゴホウラ製貝輪のうち、ここで扱う「大友型」とするものは、前記オオツタノハ着装人骨のグループ内であり、諸岡型はそれらの北西部に接して存在する。このあり方からすると、オオツタノハ製貝輪が南方的特徴の一つだとすれば、大友型貝輪の南方的性格を否定できないが、諸岡型貝輪を伴うことを考えると、北部九州弥生文化の中ととらえられ、現在は西北九州的特徴の内であらう。

## II 小川島貝塚

前述のように、一九七五年八月、富樹憲次・河兎哲司・原口決泰氏等地元研究者及び、唐津東高生及びOB等によって発掘調査された貝塚である。遺跡は、小川島の南面した小湾に、西側の山地から東へせり出した砂丘上に営まれており、現在田島神社・保育園の敷地となっている。遺跡は縄文中期〜晩期・弥生前期〜後期・古墳時代から奈良時代までの長期にわたる貝層を形成するが、縄文・弥生・歴史の各時代毎に少しづつ地点が異なっている。遺跡は、埋

葬遺跡でもあり、保育園建設時に二体（二体は両側上顎犬歯抜歯がある）、発掘調査によって埋葬人骨二体（他に散乱人骨二体分）が検出され、以前に二体ほど人骨が発見されたが再び埋め戻され、現在上に祠が建てられている。これら人骨は、砂丘北側部分約10m四方に集中し、墓地を形成している。時期は明確にしがたいが、付近より出土する土器片よりして、縄文時代晩期から弥生時代前期頃のものとして推定している。問題とする貝輪片（第二図）は、これら埋葬地から西へ20m程離れたJ区より出土したものであるが、表土層に近く層が不安定で、時期の決定はできない。夜臼式、夜臼・板付Ⅱ式、中期初頭の層のあるD区は、J区より約20m程離れており、関係をすることはできない。時期は不明といわざるを得ないが、逆に大友遺跡例よりして弥生前期後半と推定する他はない。

貝輪は、単独一個でしかも小破片であり、着装されていたものが遊離したものは、ただちに考えられない。ゴホウラ貝螺背部の利用部位・製作上の特長は大友遺跡例と同様であることは前述の通りである。復元内孔径は5cm程度で、大友遺跡側にくらべるとかなり小ぶりである。貝輪の上縁に縦の刻目が認められるが、小川島遺跡におけるこの貝輪が、元来円環状の貝輪として利用されていたものか疑問な点があり、貝輪の再生利用のための加工とも考えられる。大友遺跡とは海上6kmを隔てた対岸にあり、大友遺跡でも両側上顎犬歯抜歯人骨が検出されており両遺跡のつながりは強いと考えられる。大友遺跡同様、『魏志』倭人伝の「水人」・『肥前国風土記』にみられる「白水郎」の活動の考えられる遺跡である。<sup>(13)</sup>

### Ⅲ 中山貝塚

広島県広島市中山町東谷にあり、広島大学を中心として（団長松崎寿和広大教授）、一九五八年八月（第一次）、一九五八年十二月（第二次）の二回の発掘調査が行われた。

貝塚は広島湾にのぞむ小丘陵の先端部にあり、遺跡地の標高10mで西から東へ傾斜する面に堆積する。貝種は、内湾性の貝種の堆積をみる。貝輪は、本稿で取り扱う大友遺跡例類似貝輪片と、岡山県門田遺跡（岡山県立博物館一九七

一）、香川県紫雲出遺跡（小林・佐原一九六四）出土貝輪と類似した形を持つ、ゴホウラ製諸岡型<sup>14</sup>に分類される貝輪が出土し、他に二枚貝製貝輪が出土している。大友遺跡例類似貝輪は、明確な層位は不明であるが、出土した部分より弥生中期に属する遺物は検出されておらず、中山Ⅱ式（前期末）と考へても良いことであつた。<sup>15</sup>貝輪は、小片であり貝輪と断定しがたかつたが、大友遺跡例と比較すると、大きさ・加工法はすべて同じで、大友遺跡例と同じ形態を持つ貝輪の破片として間違いないと思われる。

### (3) 小結

さて以上検討してきた三遺跡より出土した貝輪は、いずれも弥生時代前期後半と考へられるもので、ゴホウラ製貝輪の九州本土における最も古い例に属するものである。貝輪は、断面「ハ」の字形をなす広田遺跡例に比較して、外唇部を取り込みその厚みを平坦に研磨し、全体として扁平な感じを与える。どちらかという、二枚貝製貝輪の感じを与える貝輪であるといえる。

出土遺跡は、いずれも海岸部に近い遺跡で小川島貝塚・中山貝塚は貝塚を形成する。三遺跡とも二枚貝製貝輪を持ち、特に大友遺跡ではオオツタノハ製貝輪を着装した人骨が多いなど、埋葬遺構の種類などとあわせて、西北九州海岸部の埋葬遺跡でのあり方と共通するものがある。三遺跡の貝輪は、形態がほとんど同じといって良く、同一個所で製作された可能性が強いといえる。前述のように、この形態を持つ貝輪は、広田遺跡を中心とする南島地方では現在までのところ発見されておらず、时期的にも広田遺跡例に先行するなど、素材の点は別にして現在のところ直接結びつけるものはない。ただ鹿児島県高橋貝塚（弥生時代前期前半）のゴホウラ製貝輪未製品の中に、この大友遺跡例の未製品としても不都合のないものがあり、高橋貝塚との結びつきは、考慮の対象となる。<sup>16</sup>

以上のように、所謂広田型貝輪と分布及び年代が異なり、意図する形も異なっており、広田遺跡出土例を従来通り広田型とし、大友遺跡出土例を中心とした貝輪を、背面利用貝輪の一種として「大友型貝輪」の名称でとらえておきたい。<sup>17</sup>

## (二) 繁根木型貝輪

### (1) 貝輪の形

大友型と同じく、背面貝輪として広田型に分類されていた貝輪であるが、永井昌文氏が、南島に主要分布を持つ所謂広田型貝輪（亜型A）と区別して、広田型亜型Bとしたものである。永井氏は、第31回人類学・民族学連合大会（一九七七年十月）で口頭発表し、一九七八年一月の朝日新聞社主催「古代を掘る―博多の地下二〇〇〇年」展において、それに型式名を付して「繁根木型貝輪」として分類した。

連合大会発表要旨（永井一九七八）によれば、「背面の利用部が著しく拡大しているのが特長で、螺塔及び前溝側への延びがひどく、長径16 cm・幅径11 cmに達する。内孔は倒卵形に近い」としている。補足的な説明を加えると、ゴホウラ貝螺背部を殻口面にほぼ平行に殻頂部より切りはなし、螺背部中央に径6〜7 cmの円形又は倒卵形の穴をあけている。名木野古墳（福岡県）例よりみれば、二つのタイプがあり、a類・殻頂部まで完全に取り入れたもの、b類・螺塔の次体層・螺層の一部を取り入れたもので、全体的に丸みをおび、所謂広田型に似るが、前溝側へのびる。しかし、この二者は、作り方・意図するところに基本的に差はないと考えられる。しいてその特色をいえば、以下に検討する遺跡でのあり方は、一点しか出土しない場合はa類のみで、二点以上出土した場合にb類がみとめられる事があげられる。

この種の貝輪は、永井氏が注目しているように、出土する遺跡は、古墳時代に限られ、特異な分布を示している。現在までに判明している出土遺跡は、次の七遺跡である。

- 1、繁根木古墳（熊本県玉名市）
- 2、名木野古墳（福岡県山門郡瀬高町）
- 3、関行丸古墳（佐賀県佐賀市）

所謂広田型貝輪の細分について（木村）

所謂広田型貝輪の細分について(木村)

一〇四

4、塚堂古墳(福岡県浮羽郡吉井町)

5、宝満宮古墳(福岡県朝倉郡杷木町)

6、櫛山古墳(福岡県飯塚市)

7、大坪地下式横穴(宮崎県東諸県郡国富町)

(2)繁根木型貝輪出土遺跡

I、繁根木古墳

熊本県玉名市繁根木<sup>(18)</sup>にあり、円墳で頂上に舟形石棺を持ち、主体部として方形プランの横穴式石室がある。貝輪は、明治十七、八年頃、頂上にある舟形石棺内より、直刀五本・不明鉄器・槍とともに発見されたものという。貝輪は、三個出土したとするが、梅原末治氏調査時には二個現存していた。出土状態等は不明である。

貝輪には、a類・b類の2タイプが認められる。大きさは、

a類、外形 14.6 × 10.7 cm

内孔径 7.0 × 6.3 cm

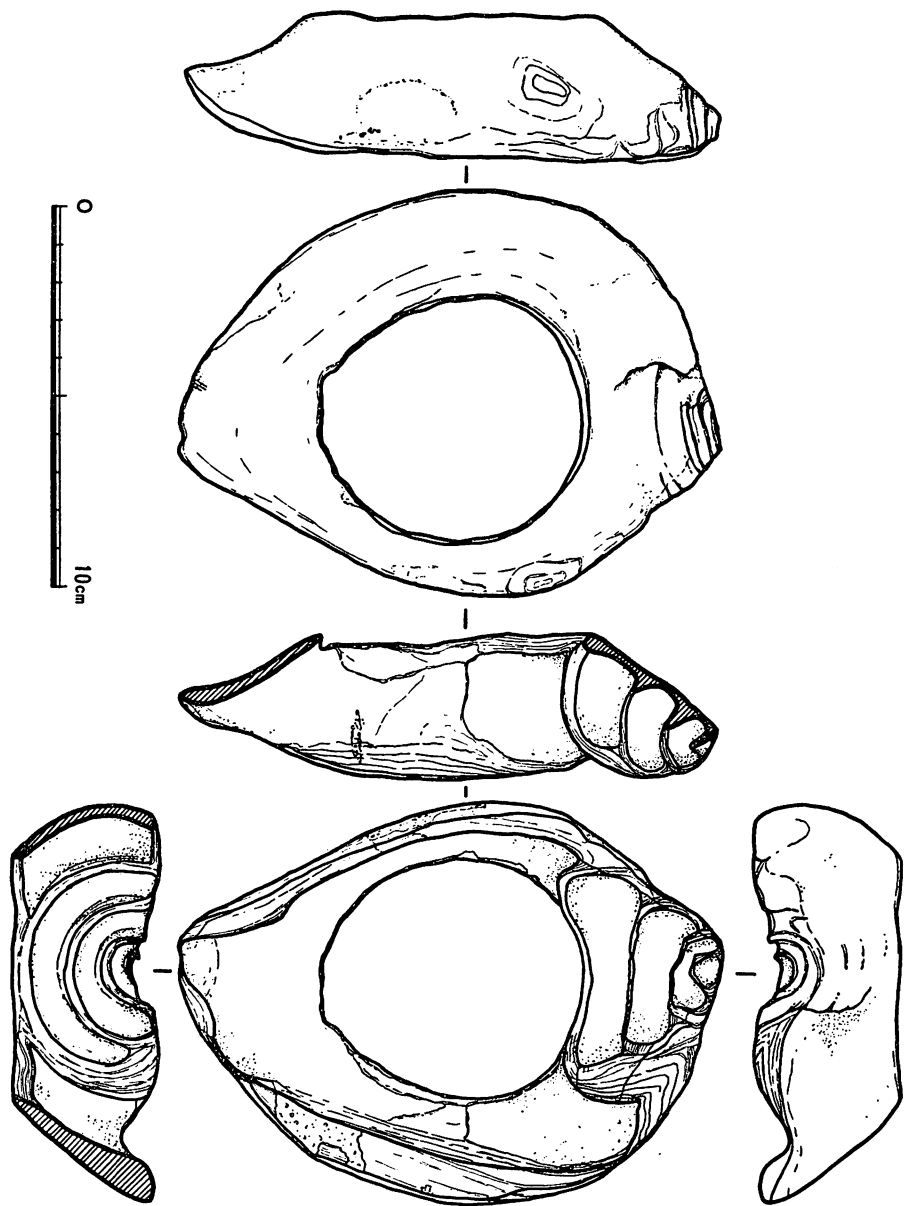
高さ 3.8 cm

b類、外形 12.0 × 9.7 cm

内孔径 7.7 × 6.9 cm

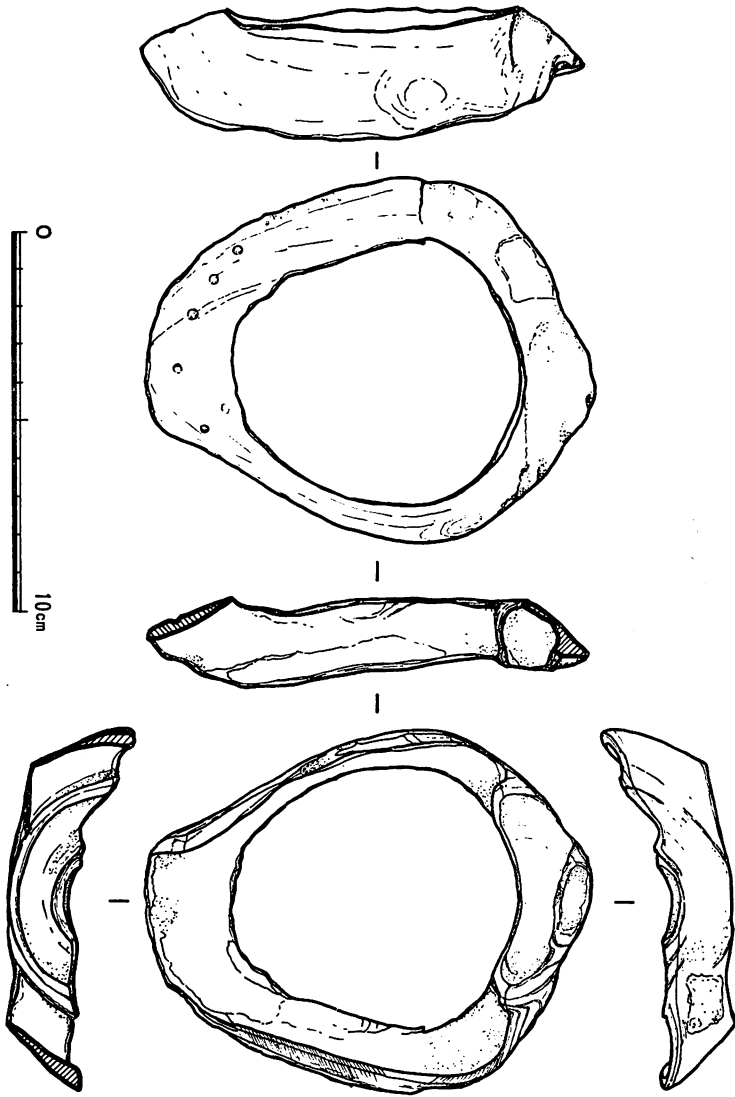
高さ 2.0 cm

である。b類貝輪の前溝付近外面に、径2 mm深さ0.8 mm程の凹みが外縁にそって五个認められる。人工的なものと思われるも確定的でない。人工的なものであるとすると、装飾を意図したものであろうか。貝輪を出土した舟形石棺は、内側を削りぬき、蓋は屋根形をなすが突起を持たず、棺身の両小口に突起を持つ。舟形石棺は、菊池川流域に多い形



第5図 繁根木型貝輪 (a) (繁根木古墳出土)





第6図 繁根木型貝輪（b）（繁根木古墳出土）

式で、五世紀中頃に盛行するが、寄棟形に近い蓋を持ち、やや時代が下がると思われる。石室は、方形プランで、四周に障壁を持つ割石積で持ち送り式の壁を持ち穹窿形天井をなす。石室内より横矧板鋳留式短甲・小札鋳留式眉庇付冑が出土している。石棺と石室の前後関係は不明であるが、時期的には似ていると考えられ、五世紀後半代（古墳前期Ⅳ期）といえる。

## Ⅱ、名木野古墳

福岡県山門郡瀬高町小田にあり、一九七六年十月～十一月に、福岡県文化課により発掘された。貝輪の発見された9号墳は円墳で、石室は調査者のいう横穴式石室Ⅰ類に当たる（瀬高町教委一九七七）。長方形プランで基部にやや大きめの割石を据え、上に割石の平積を行う。古墳の年代は、9号墳周構内出土土器から五世紀後半と考えられている。人骨は、四体以上検出されており、貝輪は左壁に寄って石室中軸線に平行な人骨の下肢付近に貝輪外面を表にして壁に平行に二個並んで出土している。石室内人骨は乱れており、貝輪も原位置を保っているとは考えにくい。したがって着装されていたものか、副葬品として置かれていたものか不明である。

貝輪の大きさは、

a 類	外形	15.7 × 11.4 cm
	内孔径	7.7 × 6.7 cm
	高さ	5.0 cm
b 類	外形	12.7 × 10.5 cm
	内孔径	7.0 × 6.7 cm
	高さ	3.0 cm

であり、外形は大きさ形とも若干異なるが、内孔径はほぼ同じ数値を示す。

所謂広田型貝輪の細分について（木村）

### III 関行丸古墳

佐賀県佐賀市久保泉町川久保字神上にある前方後円墳(全長55m)で、一九五七年五月佐賀県教育委員会によって発掘調査された(渡辺一九五八)。主体部は後円部の前半部で中軸線より北寄りにあり、北側のくびれ部に向かって開口する横穴式石室である。長さ4.35m・巾2.8mの長方形プランを持ち、腰石に大きな石を置き、その上に小形の石を平積にしてせり上げ、蒲鉾形天井をつくる。奥壁に接して仕切り石によって三屍床を設ける(第七図1)。北壁に接して一床(第1屍床)、奥壁に平行して二床(第2・3屍床)を設ける。構築順序は、その作り方からすれば、奥壁に接した第2屍床、北壁に接した第1屍床・第2屍床に接した第3屍床となる。石室内は、天井部と羨門部を除きすべてに鉄丹が塗られる。石室内腰石上面のレベルに楔状の平石が、各壁面数個づつ差し込まれている。<sup>19)</sup>

貝輪は、第2屍床やや南寄り奥壁に接してあり、歯牙の位置からすると、南向頭位埋葬人骨(性別不明・若年)の右手に着装されていた可能性がある。貝輪は内側面を上、殻頂部を奥壁に向けて、推定される埋葬人骨に直角の位置で出土している。<sup>20)</sup>貝輪は殻頂部よりとり入れたもので(a類)、外形は14.2×10cmである。内孔径は内孔面が欠損し不明である。第2屍床には、北頭位で石枕を持ち、金銅冠破片・珠文鏡を持つもう1体の埋葬人骨が推定されている。他に、第3屍床より、イモガイ製横型貝輪が一個出土している。羨門外より三環鈴が出土しており、石室構造は横穴式石室として古式に属する佐賀県横田下古墳より後出的であり、後期の発達した横穴式石室と異なることにより、A.D.五〇〇年前後、五世紀後半に年代をおいている。

### IV、塚堂古墳

福岡県浮羽郡吉井町宮田にあり、付近に月の岡・日の岡古墳がある。一九三四年八月に前方部に石室が発見され、宮崎勇蔵氏によって調査された前方後円墳である(宮崎一九三五)。石室は前方部中央西端にあり、横穴式石室である。羨道はなく、長方形プラン(3.2×5.9m)をなし、高さ1.94mの割石小口積の石室である。奥壁下に長さ1.51cm・巾36cm

・高さ23 cmの石床を置き、上に短甲2個、鉄鍬数十本をのせる。石床前面左右に短甲と衡角式冑を置く。埋葬人骨兩脇に直刀を2本づつ置き、仿製神獸鏡を足元左方に置く。床面より1.18～1.2 mの高さに、長さ15 cm程の扁平な石を利用した石柵を奥壁・左右兩壁にそれぞれ二個づつつける。<sup>(22)</sup>

貝輪は、石室中軸線上に埋葬された人骨の右側上腕付近に、内側面を上にして検出された(第七図2)。人骨は、歯牙の残存は良好であるも、四肢骨等は、白色の痕跡程度である。しかし先きにみた関行丸古墳より以上に貝輪の着装状況(?)を示すものといえる。しかしこれととも、着装されていたと断定できる資料とはいえない。貝輪は、外径14×11 cmで、関行丸古墳と同様、内孔部分を欠く。<sup>(23)</sup>形はa類に属する。一九五三年の後円部石室の調査では、三環鈴が発見されており、関行丸古墳と編年の位置の近いことを示している。

#### V、宝満宮境内石棺

福岡県朝倉郡把木町志波にあり、前述の塚堂古墳とは、筑後川をはさんで対置する。宮崎勇蔵氏が、塚堂古墳の報告の中で「昭和六年比の古墳の北方半里筑後川を越えた朝倉郡志波村宝満宮境内の箱式石棺内より出土している貝釧と全く同形同類のものである。」(宮崎一九三五)としているものであるが、島田寅次郎氏の「朝倉志波村宝満宮境内古墳」(島田一九三二)の報告には、貝輪出土の記載はない。島田氏が直接調査にあたったのは、一九三一年七月二十二日発掘の箱式石棺であり(2号石棺と仮称)、同年六～七月の雨で崩壊露出した石棺(1号石棺と仮称)は、簡単にふれているだけであり、1号石棺より貝輪が出土した可能性がある。1号石棺より珠文鏡一個・刀剣五個・槍一個・胸甲破片が出土し、約1 m程離れた2号石棺(内径 $187.9 \times 87.8$  cm)内よりは、埋葬人骨二体(頭の位置をそれぞれ反対に置く)あり、横矧板鋌留式短甲・冑・鉄鍬・鉄斧・鉄刀が出土している。1・2号石棺とも円墳の上に営まれたもので、時期的差はないと思われる、珠文鏡・短甲などから塚堂古墳とほぼ似た年代が考えられる。貝輪は、見ておらず、その細かな形状は不明である。

## VI、櫛山古墳

福岡県飯塚市西町字櫛山にある円墳で、横穴式石室を持つ。高橋健自氏によって、繁根木古墳出土ゴホウラ製貝輪と同種類のものとして引用されているものであるが、未見である(高橋一九二五)。詳細は、不明であるが、新羅で製作されたと推測される垂飾付帯金具が出土しており、古墳は六世紀代に下るものと考えられる。

## VII、大坪地下式横穴古墳

宮崎県東諸県郡国富町大字八代字大坪にある。前述六例と地域は大きく異なり、遠く宮崎県にとび、イモガイ製横型貝輪を比較的多く出土する地下式横穴古墳群の分布する地域にある。一九六八年に発見、石川恒太郎氏によって調査された(石川一九六〇)。調査時には、すでに遺物は持ち出されており、人骨の埋葬状態、遺物の出土状態は不明である。玄室は妻入りで、長さ4 m、中は南壁で1.43 m、北壁で1.07 mと細長く、天井の高さは1.23 mで屋根形をなす。埋葬人骨は、二体分あり、一方は女性らしいという。副葬品は、貝輪一個の他に、獸形鏡(径7.2 cm)・劍・鹿角製刀装具・鉄斧・鍬・刀子がある。地下式横穴古墳の比較的古い形式であり、副葬品からも五世紀末の年代を推定している。

貝輪は、外形15.4×10.5 cm、内孔径は6.6×6.3 cmでほぼ円形である。現在までのところ、弥生時代において、南方産貝輪の出土例のない宮崎県内におけるゴホウラ製貝輪の唯一のものである。イモガイ製横型貝輪もすべて古墳時代に入ってから出現するもので、九州北部地域とは異なった流れとして、宮崎・大分・福岡(豊前地方)といった、九州東海岸におけるイモガイ製横型貝輪の流れの上に考える必要がある。

## (3)小結

以上、永井昌文氏が広田型亜型Bとした貝輪出土遺跡を検討してきたが、ここで再びまとめて考えてみる。

貝輪を、名木野9号墳出土例によって、a・bのタイプに分類したが、ほとんどはa類に属し、b類は複数個出土した繁根木古墳・名木野古墳にかぎられている。a類・b類の違いは、外形の大きさに現われているだけで内孔径に

違いはない。貝輪の大小は、原料となるゴホウラ貝の大きさに左右される面があるが、a類貝輪は、その外形がいずれも縦長14〜16 cm、横巾10〜11 cmと似かよった大きさを示し、原材料のゴホウラ貝も、ほぼ似た大きさのものを用以ていたと考えられる。形は体層部を取り去り、殻頂部・肩角をとり込んだ螺背部の周囲を整形し、その中央部に径7 cm前後の凹形又は倒卵形の孔を穿つだけで、比較的原材料の姿を残しており、その製作にあたって個人差・形のバリエーションが出にくい事は事実であるが、いままで見てきたようにほぼ同時期に、近接した地域に分布することは、その貝輪の供給地が同一と考えられる可能性が強い。

次に、この種の貝輪の着装の有無について検討してみる。貝輪の出土状態の判明している遺跡が三例（塚堂古墳・関行丸古墳・名木野9号墳）であるが、名木野9号墳の場合、原位置とはいいがたい面があるので、結局、塚堂古墳・関行丸古墳の二例のみである。塚堂古墳では、右手肘付近にあり、右手への着装を思わせ、関行丸古墳も、歯牙の位置等により埋葬人骨の位置を推定すると右側前腕あたりに相当し、着装されていた可能性があった程度で、確実な着装例はなく、まして生前着用していたと考えられる根拠はいまのところ見当たらない。弥生時代におけるゴホウラ製貝輪は、広田型・大友型を除いて、その多くは、男性の右前腕に着装されており、その伝統の強さを考えるのであるが、後に述べるように、弥生時代との間に一段階おいて考えるべきであると思う。内孔の大きさからいえば、着装は可能である。内孔径の判明するものは、

繁根木古墳 a類 6.86 × 6.0 倒卵型

b類 7.2 × 6.35

名木野古墳

a類 7.8 × 6.5

b類 6.8 × 6.1 やや倒卵型

大坪古墳

a類 6.6 × 6.3 円形

所謂広田型貝輪の細分について（末村）

の数値を示し、実際に着装されていた広田遺跡例は、いずれも内孔形が5〜6 cmの円形又は楕円形をなすもので、内孔径ではうまわっている。

貝輪出土古墳が、九州の古墳文化の中でどのような位置を占めているのか、その概略を見ると、四世紀後半九州において大和政権の九州進出の結果として畿内型古墳が、北部九州から東九州の沿岸地方に分布する。前方後円墳で、割石小口積の細長い堅穴式石室を主な内部構造として持ち、副葬品には、鏡・玉・鉄製武器・工具がみられる。特に、三角縁神獸鏡や碧玉製腕飾（鍔形石・石劍・車輪石）の出現は古式古墳を特色づけている。大和政権の朝鮮半島に對する前線基地的性格を北部九州は持っていたが、五世紀前半代になり老司古墳（福岡市）に見られる堅穴系横口式石室を成立させ、さらに五世紀中頃大陸式の横穴式石室を導入し、横田下古墳（佐賀）、丸隅山古墳（福岡）等が、北部九州地域に成立する。五世紀中頃畿内墓制の第二段階として九州中央部・内陸部に、長持形石棺・舟形石棺が流入する。同じく五世紀後半代に、九州独自の墓制として、横口式家形石棺と九州に伝統的な箱式石棺を石室内に持ち込む形をとる石障式横穴式石室を成立させる。このように五世紀後半代までに畿内勢力が九州地方に広く及び、その中に九州的なものが錯綜し、在地性が強調されはじめる。畿内勢力が九州地方に及んだことは、文献的には、景行紀・仲哀紀等に見られる具制の設置によってうかがいうる。それらは、畿内型古墳分とかさなり、地域的に貝輪出土古墳ともかさねあわせて考えることができる。

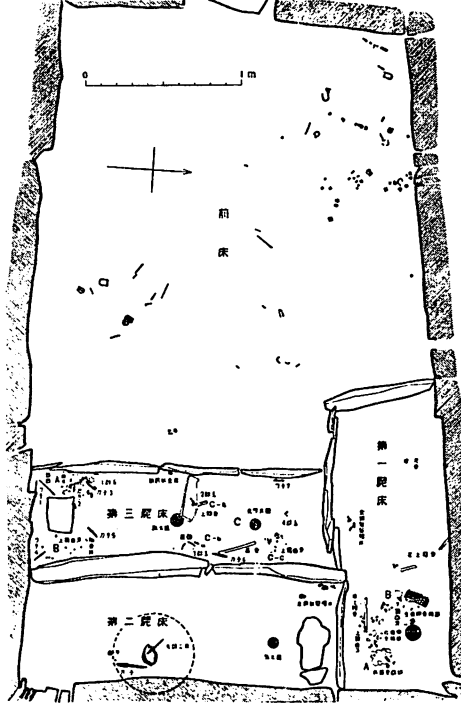
貝輪は、以上みてきた流れの中で、畿内勢力の及ぶ地域にあって在地性が強調されはじめた頃の古墳に出土していることになる。しかし、その反面、筑紫君の勢力範囲に分布する初期の石人出土古墳の周辺部に当たる肥前・筑後・肥後の古墳から出土することも考慮される。

貝輪出土古墳は、類似した石室・副葬品を持つ。もちろんそれは、古墳の成立年代の同時性を示す材料であるが、その古墳の性格を表わしているともいえる。関行丸古墳・塚堂古墳より出土している三環鈴は、石山勲氏によれば、

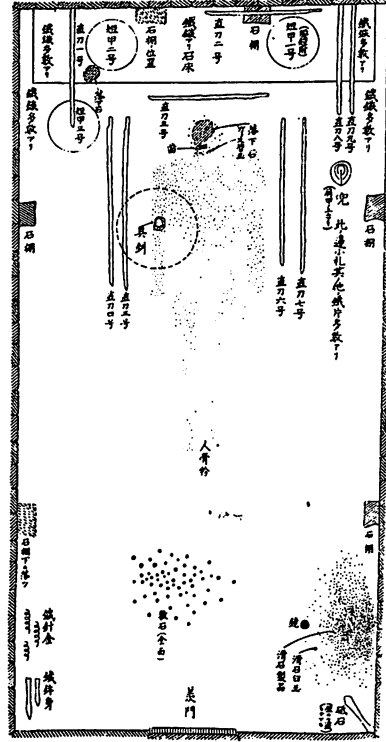
「ほぼ五〇〇年代を中心とした時期・甲冑を伴う。各地域の盟主墳たる例多く、被葬者は、<sup>24</sup>国造軍を率いて渡海した一軍の将一と想定できる」とする(石山一九七七)。年代の根拠となるとともに、初葬者が海を渡る技術を持った人(集団の長)であるとすれば興味深い。貝輪出土古墳が、有明海周辺(筑後川流域も含めて)に分布するということは、海とのつながりが考えられることであり、特に南島海域産出貝輪であるゴホウラ貝製品を有することは、その入手にあたって重要な点となったと思われる。

さて、最後に、ゴホウラ貝製貝輪が、この時期にこの地域に何故副葬されるようになったのかを検討しなくてはならない。五世紀後半代といえ、九州北部地方で、ゴホウラ貝製貝輪がみられなくなってから二〇〇年近く経過したことになる。ここで考えてみたいのは、車輪石との関係である。以前、高橋健自氏は、繁根木古墳・榎山古墳の貝輪が、車輪石又は青銅製環に変化したのではないかと考えたことがあった(高橋一九二五)。しかし、現在になってみれば、年代的に順序が逆転し、その考えは成立しないことになる。しかし、この逆は考えられないだろうか。<sup>25</sup>畿内型古墳には、副葬品として、碧玉製腕輪類があり、小林行雄氏は、「古い文化活動の様相」としての舶載鏡の分与の後、「新しい文化活動の様相」として仿製鏡・碧玉製腕輪の分与を考えている(小林一九六一)。九州には、これら碧玉製腕輪の出土例は少ないが、その中でも、向野田古墳(熊本県宇土市)は、その出土状態を良好に示している(富樫一九七八)。前方後円墳の後円部中央の竅穴式石室におさめられた舟形石棺内には成年女性(30〜40才)が伸展葬されており、その右側大腿骨の大転子の外側に、車輪石は表面を上にして石棺の中軸に平行に置かれていた(第七図3)。車輪石の置かれていた位置は、丁度伸展葬で手首の位置するあたりで、着装されていた疑いもあるが、出土状態に乱れがないことから、調査者は埋葬時に置かれた疑いがあるとしている。碧玉製腕輪の多くは、宝器的性格として埋葬に際して埋納されたもので、棺の中でまとめて置かれたり、丁度手首のあたりに置かれたりされており、確実な着装例はない。向野田古墳の場合も、埋葬時に置かれたと考えるのが他の例よりも適当であろう。向野田古墳の車輪石

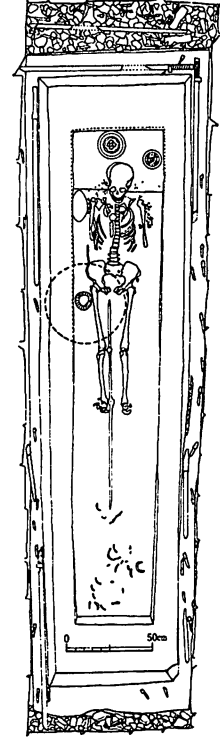




(1) 関行丸古墳



(2) 塚堂古墳



(3) 向田古墳(車輪石)

は、外形10.2×9.3 cm・内孔径6.0×5.1 cmで、いままで見てきたゴホウラ製貝輪と類似した数値を示しており、形も弥生時代ゴホウラ製貝輪と違い鏝広で似かよふ点がある。<sup>(27)</sup>この碧玉製腕輪は、前述のように古墳時代前期に畿内を中心に広まったもので、古式古墳を特長づける副葬品となっている。向野田古墳は四世紀末から五世紀初に年代を置いており、ゴホウラ製貝輪出土古墳の間に年代的空白が存在し、直接系譜をたどることが出来ないことはもちろんであるが、九州におけるゴホウラ製貝輪の再登場は、畿内型古墳が九州に広く分布するようになる時、九州の在地性の強い古墳が造られはじめた頃であり、車輪石の持つ性格・イメージを、ゴホウラ製大型貝輪に求めたことも考えられないであろうか。関行丸古墳・塚堂古墳に見られる貝輪の出土状態と、向野田古墳の車輪石埋納状況の類似はその感を強くする。在地性が強くなった時とはいいいながら、比較的畿内勢力の浸透した地域に貝輪出土古墳のあることも、これを裏付けるのかもしれない。

古墳時代における大形貝輪副葬例として

- (1) 竹並古墳<sup>(29)</sup> (福岡県行橋市)
- (2) 塚山古墳<sup>(30)</sup> (島根県簸川郡斐川町学頭) 古墳中期
- (3) 紫金山古墳<sup>(31)</sup> (大阪府茨木市宿久荘) 古墳前期
- (4) 龍ヶ岡古墳<sup>(32)</sup> (福井県福井市足羽山) 古墳中期
- (5) 松林山古墳<sup>(33)</sup> (静岡県磐田市新貝) 古墳前期
- (6) 銚子塚古墳<sup>(34)</sup> (山梨県八代郡中道町) 古墳前期
- (7) 鎧塚1号墳<sup>(35)</sup> (長野県須坂市八丁) 古墳前期

が良く知られている。(1)はゴホウラ製金限型貝輪で、明治年代の発掘で出土状態不明である。(3)も同じくゴホウラ製金限型貝輪であるが、他の碧玉製腕輪類と埋葬され、着装はされていない。(2)の塚山古墳貝輪は、貝種名を明ら

かにしえないが、二点出土しており、一点は外形長14.5 cm、内孔長8.2 cm、高さ5 cm、他の一点は外形長13 cm・内孔長7.6 cm・高さ4.6 cmである。島田貞彦氏の報告によれば（島田一九二七）、石棺内伸展葬人骨の両上肢骨辺に置かれていたとし、図面よりすると、両側上肢の肘付近内側に1個づつ置かれており、着装されていなかったらしい。(5)と(7)はいずれも水字貝製貝輪であるが、出土状態の明確な(5)は、狭長な竪穴式石室の東北隅に2個まとめて置かれており、遺体とは無関係の位置にあった。(4)は、貝種不明の車輪石を模したと思われる貝輪で二個あり、1個は外形10.8×9.0 cm、内孔径6.2×5.5 cm、他方は外形9.0×7.0 cm、内孔径6.7×5.5 cmで、二個重ねられて舟形石棺の南壁近く男性（20才位）頭蓋骨に接して置かれていた。イモガイ製横型貝輪がそれから若干離れて東北隅にあり、又石釧が、男性人骨の足元で、女性入骨の左側に6個置かれていた。このように古墳時代における大形貝輪の出土例をみると、いずれも着装状態を示すものではなく、碧玉製腕輪類と似た出土状態を示しており、宝器的又は呪術的なものとして置かれたと考えられる。イモガイ製横型・オオツタノハ製貝輪に九州地方を中心に着装例が認められるのと対照的である。したがって本稿で扱ったゴホウラ製貝輪も、埋葬にあたって埋納された可能性が高いといえる。

以上のことを再びここでまとめてみると、

(一)年代的には、五世紀後半代と考えられる。

(二)地域的には、有明海周辺に主要な分布を見る。

(三)貝輪の性格としては、着装埋葬されていたとするより、主に宝器的又は呪術的性格を持った副葬品として埋納されたと考えられる。

四形態的には、外形約14×10〜11×7 cmで、殻頂部まで取り入れ、前溝方向への伸長が大きい。内孔径は約7×6 cmで、円形又は卵形をなす。大きさからいうと車輪石と類似した点がある。

となり、所謂広田型貝輪とは、かなり異なった性格を持ったものであることがわかる。したがってここでは、永井氏の広田型匝型Bとしたものを独立型式として認識し、この種の貝輪の一番古い発見例の遺跡名をとり、「繁根木型」と名付けたい。

### 三、結 語

以上、従来広田型と称されてきた九州本土における貝輪を再検討してきたが、河口貞徳氏のいう背面腕輪としては、広田遺跡例と同じ範疇に入るが、年代的・地域的・性格的に異なる点がある。したがって、広田遺跡出土例を中心としたものを従来通り「広田型」とし、九州本土における二者のうち大友遺跡例を中心としたものを「大友型」、古墳時代のゴホウラ製大形貝輪を「繁根木型」として分離させるのが適当であろうと考える。大友型・繁根木型は、各々の形式内ではきわめて似かよった形を持ち、供給地がそれぞれ同一地であろうと推定されるが、その入手先・入手経路は不明としかいいようがなく、今後の究明に待つ他はない。

### 四、お わ り に

このように、従来の各型式を検討すると、各型式内それぞれに種々の形態の変化があるのに気づく。そのことは、いままで編年的意味合いで検討されることはあったが、それだけでなく、貝輪製作上からくる各貝輪の特長を検討することによって供給源と需要地との関係を推定する手掛りが得られる可能性がある。この意味で、註11・14・17でふれたように、各型式の個々の貝輪を検討して特長を抽出する事は必要になってくる。本稿は、そのような意味も含めて草しているが、広田型貝輪の細分を本旨としていたので、他の型式にはふれ得なかった。稿を改めて検討するつも

りである。

なお、本稿は、筆者が九州大学医学部解剖学第二講座に在職中、永井昌文教授の指導による研究過程上受けた経験及び知識、研究成果に基づくものである。在職中の指導及び便宜に改めて感謝の意を表するものである。

註

註1 文献（永井一九七七a）に述べられているように、一九六九年三月にゴホウラ貝による貝輪の完成をみたとしている。

註2 それまでゴホウラ貝であろうとされていた貝輪は、

竹並（金隈型）小川一八九〇

繁根木（広田型）高橋一九二五

檀山（"）"

塚堂（"）齋藤一九四三

徳之島喜念（"）三宅一九四三

であり、その他は、浜田耕作氏が夢野遺跡の報告で（浜田一九二二）、テングニシとしてから、「テングニシ」とする事が多かった。

註3 正式に公表されたのは「立岩遺跡」の報告書（三島・橋口一九七七）においてであるが、一九七二年四月に行なわれた展覧

会「奴国展」で、永井昌文・橋口達也氏により、ゴホウラ製縦切り五型式、イモガイ製縦切り横切り二型式に分類されている（フクニチ新聞社一九七二）。

各型式の分類については、（三島・橋口一九七七）によらねたい。

註4 （橋口一九七八）、（永井一九七八）

註5 「小川島貝塚発掘調査報告書」未刊

註6 （金関一九六六）、（国分・盛園一九五八）九州大学医学部解剖学教室に現在保管中の広田遺跡出土貝輪については、調査団

(代表金岡丈夫氏)・永井昌文氏の好意により、実見することができた。その御配慮に感謝いたします。

註7

公表された一部の資料からみたものであり、資料全体の検討次第では変更もありうる。

註8

第一次調査分としては、文献(柴元一九七〇a)、(中里一九六九)があり、第二次調査分としては、(柴元一九七〇b、一九七一)、(佐賀県文化課一九七三)、(河尻一九七一)がある。

註9

九州内でも、前田山遺跡(福岡県行橋市)の小児甕棺(弥生・中期)よりサルボウ製の貝輪1点が副葬品として出土している。これは、瀬戸内海地方に分布する弥生時代における二枚貝製貝輪と関連するものであろう。(前田山遺跡調査会一九七七)。

註10

第三次調査時の所見

註11

その特長とは、あい隣り合う貝輪が、互いに密着して着装できるように、肘側位の貝輪の外面(着装時の手首側)を、手首側の貝輪の内面(着装時の肘側)がうまきはまり込むように、やや凹みぎみに加工を加えている。大きさも、それぞれそろえており、各々セットとして入手していたと考えられる。この貝輪の特長は、第3次3号墓(石棺)人骨着装諸岡型ゴホウラ製貝輪にも認められる。着装された三個のうち、肘側の二個の外面にその加工が認められ、手首側の一個には、その加工は認められない。したがって、この諸岡型ゴホウラ製貝輪は、先のイモガイ製縦型貝輪と同一場所で作成され、セットとして入手した可能性が高い。又、九州内での諸岡型貝輪としては、一番古い例に属することになる。

註12

文献(河尻一九七六～一九七七。一九七七～一九七八)

註13

自然遺物の調査は未了であるが、縄文～弥生前期までの貝層は、岩礁に生棲する小型巻貝類が多く、比率を占めるが、弥生前期以降、歴史時代には、アワビ、サザエが多い。又、鯨骨製の「アワビおこし」とされるもの、小型の「離頭鉦」とされる骨製品が出土している。獣骨類は、イノシシ・シカが優越することは、他の遺跡と同様であるが、アシカ・鯨骨等大型哺乳動物の出土をみる。

註14

中山貝塚の諸岡型貝輪は、九州本土に分布する諸岡型貝輪と比較すると、内孔がやや縦長で、前溝付近もやや尖りぎみであり、周縁の高さはやや低めである。門田遺跡・紫雲出遺跡例と類似するが、いずれも破片のため判定しがたい。時期は、前期末と考えられており、諸岡型貝輪の瀬戸内海に分布する亜型と考えられる可能性を持つ。大友遺跡第三次第3号墓の諸岡型貝輪は、全体的に縦長で、前溝側へのび、尖りぎみであることは、瀬戸内海地方分布例に類似する点といえる。ただし、大友遺跡例は、周縁の高さが、他の諸岡型貝輪にくらべ高い。諸岡型貝輪も、Ⅰ大友3号墓出土例、Ⅱ瀬戸内海地方に分布するもの(中山

例他）、Ⅲ全体的に丸みをおびており、特に前溝付近は丸く加工される（諸岡一九五三年出土例、年ノ神例）、Ⅳ全体的にⅢに比べやや角ばった感じで、前溝付近を水平に切っているもの（スダレK1-1、二塚山K71例）の各種タイプがあり、大友例は金隈K103例にも似て、諸岡型の一番古いタイプといえる。

註15 潮見浩広大教授の御教示による。

註16 文献（河口一九七三）の第4図1-2。高橋貝塚の報告として（河口一九六五）がある。

註17 小田富士雄氏は、文献（小田一九七四）の「銅釧の型式と系譜」の表の中で、縦切り貝輪系―無釧型―大友型（ゴホウラ）として、大友型なる名称を用いているが、（ゴホウラとあるのは、イモガイの誤植か）イモガイ製縦型貝輪を示していると思われるので、大友型なる名称をゴホウラ貝に付けた。現在では、イモガイ縦型貝輪にも各種のタイプのあることが知られ、橋口達也氏も文献（橋口一九七八）でふれている。現在のところ、イモガイ製縦型貝輪には、Ⅰ大浜（長崎）例、Ⅱ大友例、Ⅲ二塚山、三津・永田（佐賀）例、Ⅳ道場山K148（福岡）、三津永田（佐賀）例の四つのタイプが知られる。Ⅰの大浜例には、外面加工上、Ⅱの大友例に特長的な加工法を取り入れており近い関係にあると思われる。小田氏の文献（小田一九七四）でふれられている干々賀銅釧は、橋口氏も指摘するようにⅣタイプから導き出される。

註18 文献（梅原一九二五）がある。

註19 北部九州においてこのような施設を持つ石室は肥後を中心に知られているが（三島一九五七）、筑後の塚堂古墳、日輪寺古墳等石室構造の似かよう筑前・筑後・豊前の古墳にもみられる。

註20 貝輪がもし、右前腕に着装されていたとするならば、手掌の位置が正位であれば、手首側に軟部及び骨の亡失とともに倒れたことになる。手掌面が、内側に向いていた（回内位にある）とすれば、貝輪は、外側方向に回転し、手首側に倒れたことになる。しかし、これだけでは着装されていたものか、副葬品的に置かれたものか判断がつきにくい。

註21 冑は、横板鋳留式衝角は冑で、短甲は石床上の2個が、横板板鋳留式短甲、石床前面の1個が、三角板鋳留式短甲である。繁根木古墳（熊本県）、宝満宮古墳（福岡県）に共通する。

註22 石棚のうち、奥壁の1個には、直刀をのせたまま発見されている。註19でふれたように、佐賀県関行丸古墳にも見られる。

註23 塚堂古墳、関行丸古墳出土貝輪とも、内面を表面にして出土しており、内孔部分は床面に接することになり、腐食が早かったと思われる。これを逆に考えれば、名木野古墳例が外側面を表にしていたことを考えると、出土状態が不明で、内孔部の残存する繁根木古墳、大坪地下式横穴出土品は、外側面を表面にしていたと推定される。

註24 大坪地下式横穴古墳の項でふれたように、大坪古墳出土貝輪の性格については、他の6例と同例に扱えない面があり、ここでは一応除外して考えたい。

この種の貝輪の未製品として不都合でないものが、沖繩県渡具知木線原遺跡で検出されているが、(文献(当真一九七七)図3-1)、年代に差がありすぎて結びつけることは不可能である。又、この程度の加工の段階ではその後の加工いかによって、所謂広田型貝輪製作が可能であり、参考程度にとどめておく。

註25 もちろん形をまねて貝輪をつくったというのではなく、その車輪石の持つ性格を、似た大きさを持つ大きさに貝を加工して持たせたということ。大きさを似せようとするとはやはり、南海産の大型貝が適当ということになる。

註26 碧玉製腕輪の九州における出土地は次の通り。(沖ノ島祭祀遺跡出土例を除く)

鍬形石

・猫塚古墳(大分県北海部郡佐賀関町) 円墳 箱式石棺

車輪石

・向野田古墳(熊本県宇土市) 前方後円墳 竪穴式石室(舟形石棺)

・大塚古墳(熊本県鹿本郡鹿本町津袋) 円墳 長持形石棺

・飯氏古墳(福岡市西区周船寺) 円墳 箱式石棺(?)

・沖出古墳(福岡県嘉穂郡稲築町) 前方後円墳 竪穴式石室(舟形石棺)

石釧

・谷口古墳(佐賀県東松浦郡浜玉町) 前方後円墳 竪穴式石室(長持形石棺)

・朝日古墳(佐賀県神埼郡神崎町仁比山) 円墳 箱式石棺

・免ヶ平古墳(大分県宇佐市) 円墳 竪穴式石室(粘土床)

・野間3号墳(大分県大分市) 前方後円墳 箱式石棺

・七ツ森B号墳(大分県竹田市) 前方後円墳 箱式石棺

註27 車輪石が弥生時代の南海産貝製貝輪の中で、オオッタノハ製貝輪を模したものであろうことは従来いわれてきている通りである。

所謂広田型貝輪の細分について(木村)



- 註 28 イモガイ製横型貝輪・オオツタノハ製貝輪を一応除外しておく。
- 註 29 ゴホウラ貝製金隈型貝輪 文献(小川一八九〇)
- 註 30 文献(島田一九二七) ラクダガイあるいはテングガイ製2個
- 註 31 ゴホウラ貝製金隈型貝輪
- 註 32 文献(斎藤優一九六〇)
- 註 33 文献(後藤一九三九)
- 註 34 文献(文部省一九三〇)
- 註 35 文献(永峯・亀井一九五九)

参考文献

- 石川恒太郎(一九六〇) 「国富町大坪地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書15・15～20頁。宮崎。
- 石山 勲(一九七七) 『新原・奴山古墳群―宗像郡津屋崎町大字勝浦所在古墳群の調査』(福岡県文化財調査報告書54)福岡。
- 梅原末治(一九二五) 「熊本県下にて発掘せられたる古墳の調査―玉名郡繁根木の古墳―」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告2  
・80～89頁・熊本。
- 小川敬養(二八九〇) 「豊前国仲津郡発見ノ貝輪」東京人類学会雑誌49・200～201頁・東京。
- 小田富士雄(一九七〇) 「五島列島の弥生文化―総説篇」人類学考古学研究報告2・1～50頁・長崎。
- 〃(一九七五) 「日本で生まれた青銅器」古代史発掘5・137～149頁・東京。
- 金関文夫(一九六六) 「種子島広田遺跡の文化」FUKUOKA UNESCO3・福岡。
- 河見哲司(一九七二) 「魏志倭人伝に活躍する水入集団の大友弥人生人」末盧国36・5～7頁・唐津。
- 〃(一九七六～一九七七) 「小川島貝塚調査1～3」末盧国56～58・唐津。
- 〃(一九七七～一九七八) 「小川島貝塚調査4～5」末盧国61～62・唐津。
- 河口貞徳(一九六五) 「鹿児島県高橋貝塚」考古集刊3―2・33～109頁・東京。
- 〃(一九七三) 「鍛形石の祖形―松ノ尾遺跡出土の貝製腕輪」古代学研究70・1～14頁・大阪。
- 国分直一・盛園尚孝(一九五八) 「種子島南種子島町広田の埋葬遺跡調査概報」考古学雑誌43―3・1～31頁・東京。

- 小林行雄 (一九六一) 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」古墳時代の研究・163頁・東京。
- 小林行雄・佐原 真(一九六四) 『紫雲出』京都。
- 後藤守一 (一九三九) 『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』静岡。
- 斎藤 忠 (一九四三) 「貝釧と石釧」考古学雑誌33頁・7・303頁・東京。
- 斎藤 優 (一九六〇) 「龍ヶ岡古墳」足羽の古墳28頁・40頁・福井。
- 坂田邦洋 (一九七三) 「長崎県根獅子遺跡の発掘調査」考古学ジャーナル79頁・14頁・東京。
- 潮見 浩 (一九六二) 「広島県広島市中山貝塚(第1次・第2次調査)」日本考古学年報11頁・93頁・東京。
- 柴元静雄 (一九七〇a) 「大友弥生時代遺跡発掘調査概報1」新郷土23頁・10・50頁・佐賀。
- 〃 (一九七〇b) 「大友弥生遺跡発掘調査概報(その2)」新郷土23頁・11・47頁・佐賀。
- 〃 (一九七一) 「大友弥生時代遺跡発掘調査概報(その3)」新郷土24頁・1・49頁・佐賀。
- 島田貞彦 (一九二七) 「出雲国簸川郡莊原村塚山古墳に就て」歴史と地理19頁・1・107頁・京都。
- 島田寅次郎 (一九三二) 「箱式石棺内における合葬遺跡の調査」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告7頁・49頁・福岡。
- 高橋健自 (一九二五) 「車輪石・鍬形石及び石釧の研究 附貝器の青銅化」考古学雑誌15頁・6・7頁・東京。
- 富樫卯三郎 (一九七八) 『向野田古墳』(宇土市埋蔵文化財調査報告2)・宇土。
- 当真嗣一・上正勝・比嘉賀盛(一九七七) 「沖縄県渡具知木綿原遺跡の発掘調査」考古学ジャーナル11頁・8頁・東京。
- 中里紀元 (一九六九) 「呼子大友海岸の遺蹟」末盧園29頁・6・7頁・唐津。
- 永井昌文 (一九七六) 「奄美と貝輪」人類科学29頁・79頁・92頁・東京。
- 〃 (一九七七a) 「貝輪」立岩遺跡・267頁・283頁・東京。
- 〃 (一九七七b) 「貝輪と弥生人」人間と文化・7頁・21頁・東京。
- 〃 (一九七八) 「縦型貝輪のうち特に南島型について」人類学雑誌86頁・2・127頁・東京。
- 峯永光一・亀井正道(一九五九) 「長野県須坂市鋸塚古墳の調査」考古学雑誌45頁・1・1頁・22頁・東京。
- 橋口達也 (一九七八) 「K-48人骨着装の貝輪」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告25頁・172頁・福岡。
- 浜田耕作 (一九三五) 「貝輪を入れた素焼壺」人類学雑誌36頁・8・12・21頁・208頁・東京。
- 松崎寿和・潮見 浩(一九六一) 「広島県中山遺跡」日本農耕文化の生成(本文篇)263頁・273頁・東京。

三島 格 (一九五七) 「九州における突起ある横穴式石室墳」熊本史学 13・1~12頁・熊本。

〃 (一九七六) 「弥生時代における南海産貝輪の腕輪」日本民族と南方文化・205~240頁・東京。

三島 格・橋口達也 (一九七七) 「南海産貝輪に関する考古学的考察と出土地名表」立岩遺跡・284~300頁・東京。

宮崎勇蔵 (一九三五) 「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」史蹟名勝天然記念物調査報告書 10・11~27頁・福岡。

三宅宗悦 (一九四三) 「大隈国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯について」考古学雑誌 33・10・1~10頁・東京。

森貞次郎 (一九四九) 「北九州古墳の編年の考察予報」西日本史学 1・3~32頁・福岡。

渡辺正気 (一九五八) 『佐賀市関行丸古墳』(佐賀県文化財調査報告書 7)・佐賀。

岡山県立博物館 (一九七二) 『特別展 岡山県の原始・古代』岡山。

佐賀県文化課 (一九七三) 『大友遺跡発掘調査概報(図録編)』(佐賀県文化財調査報告 22)・佐賀。

瀬高町教育委員会 (一九七七) 『名木野古墳―福岡県瀬高町小田所在古墳群の発掘調査報告―』(瀬高町文化財調査報告 1)・福岡。

瀬高町。

フクニチ新聞社 (一九七二) 『奴国展―稲と青銅の弥生王国』福岡。

前田山遺跡調査会 (一九七七) 『前田山遺跡―福岡県行橋市前田山遺跡の調査概報(1)(弥生編)』行橋。

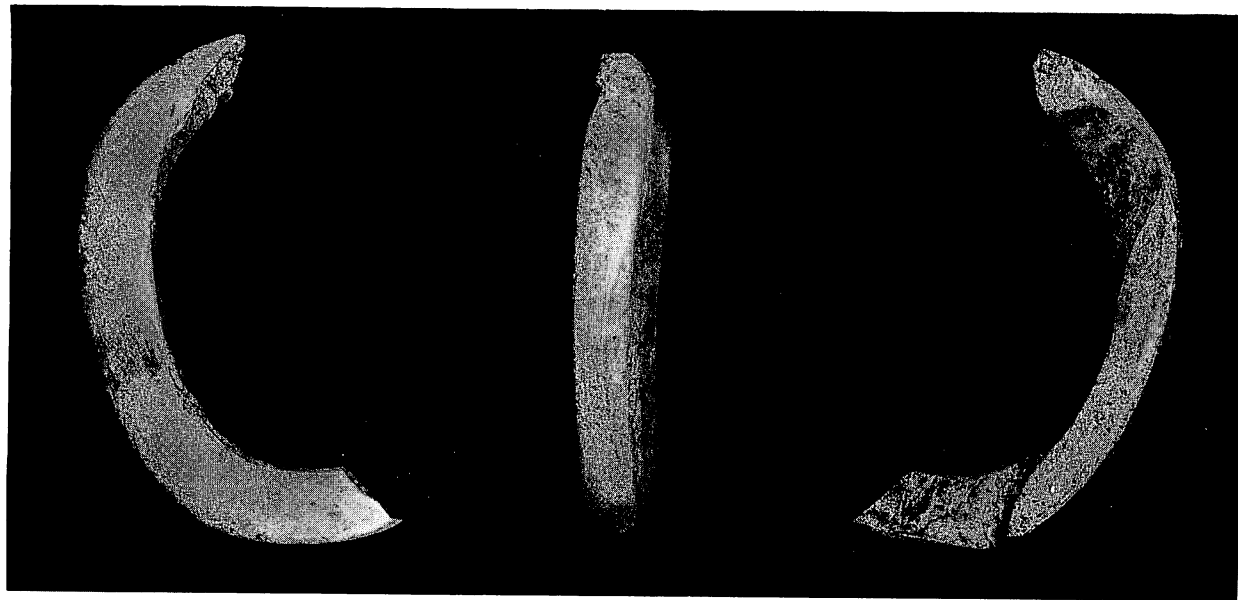
文部省(上田三平) (一九三〇) 「山梨県鉢子塚古墳 附丸山塚古墳」史蹟調査報告 5・29~34頁・東京。

(一九七九年十一月三十日稿了)

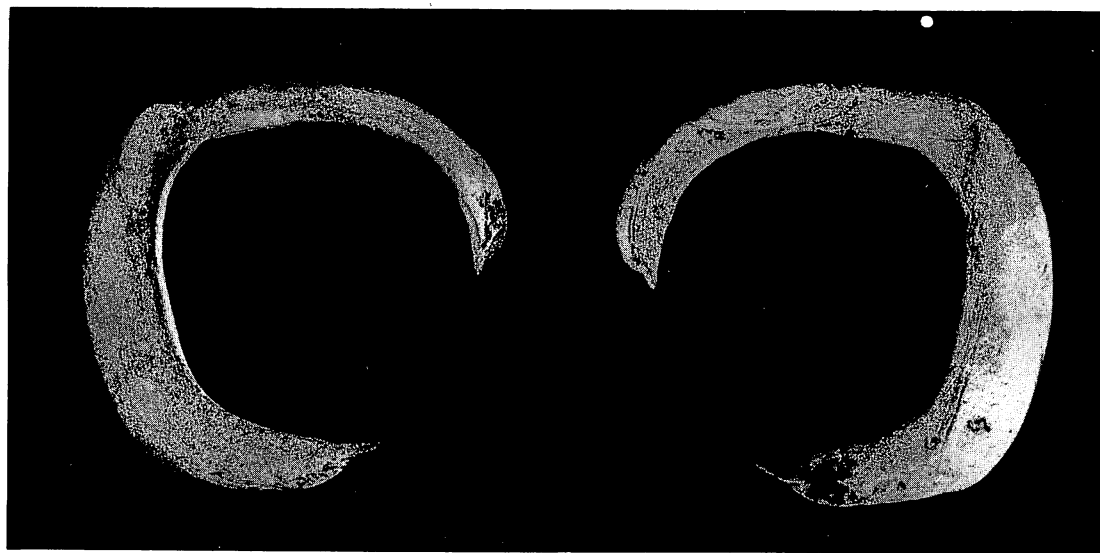
〔図版出典〕第七図一 (渡辺一九五八)、第七図二 (宮崎一九三五)、第七図三 (富樫一九七八)

〔付記〕なお、本稿作成にあたり左記の各位に御指導、御協力、御便宜をはかっていたいただいた。記して感謝の意を表します。

岡崎 敬・木下尚子・潮見 浩・志佐輝彦・田口真理・富田紘一・富樫憲次・永井昌文・那須哲夫・東光彦・東中川忠美・藤田等・森醇一朗・森貞次郎の各位。



図版1 大友型貝輪(左) 小川島貝塚出土



図版 2 大友型貝輪(2/3) 大友遺跡出土